



ところでの福さんと最近裏取引をしなければならないある事態が生じて会った時のことだ。ややこしい話の前段にと、私のはじめはじめたかと思うと、すぐに私の腰を折り、例の早口でこんな話を蕩々と語りはじめたのである。

「ペットはねえ、どうしようもないくらい可愛いものだけねえ、不測の事態に対応できなくて死ぬことがありましたねえ・・・」  
「といふと福さんも何か身に覚えが？」  
「実はねえ、私は何を隠そう鼻を内緒で飼つていったんですよ」  
「ええ、フクロウですか？」  
「えつフクロウですよ」  
「鳥なんですよ」

「それは知らないかった。初耳ですよ。でもそ  
んなフクロウをどうして、福さんが？」  
「どういふ訳か、多分親に見放されでもした  
のでしょうかねえ、私の家の前の畑にひよつ  
て現れたんですよ。どうしてそうなつたの  
かわかりませんけどね、片目を潰してまして  
のねえ、かわいそうだつたので畑のミミズを捕  
まつてやつたんですよ。そしたら居つっちゃい  
ましてねえ。きっと帰るところをなくしてし  
まつたんでしょうなあ。・・・」  
「それはまた、不思議な縁といふか、福さん  
らしい馴れ初めですか？」  
「肉食でしてねえ、あいいうものは好物でし  
て、一人前のフクロウは、自分がちやんと土  
を突いて食べるんですか？」  
「ああ、とこころがこの子フ  
クロウときたら、片目のせいから、親とは暮ら  
せす、餌の捕り方も満足に躊躇られないな  
たんでしょうなあ、それ以来、私が家に帰る  
と、私の腕に止まり、餌を要求するんですよ。

その仕草がまた可愛いときてる。ご存知でし  
きな目で、まるで三百六十度、全方位に力ク  
ツカクツと首を振つて見せる。もう参つちや  
行つてミミズを私が掘つて食べさせてやるん  
いましてねえ。それで、そのまま一緒に畠に  
「腕に止まらせたまま、手の平にミミズをの  
「どうやつて食べますんですか？」  
「腕に刺さつて痛いんですよ。からつて言うん  
に足の爪先で支えるから余計に食い込んでく  
せて差し出してやるんですけどね、腕に爪が  
「うこと聞きませんよ」  
うござんすよ。こらつて言うんですけどね、言  
湛え満足そう言いながらも、福さんは満面に笑みを  
「福口ウは野生で人にはなつかないものと  
ばかり思つてましたが、そういうこともある  
んですねえ・・・」  
「うだ。」

「それが私も不思議だつたんですけどね、思  
うに、親に捨てられたんじやないかと思うん  
です。普通ですと、親が餌を与えるながら、餌  
の捕り方、微妙なテクニックなどを子に教え  
ていくのでしようけど、どうもこの親子には  
それがなかつた。たぶん親は、片目では自分  
で餌を捕ることができないと判断して見切り  
をつけたか、子は子でみんなについていけな  
いと親子の暮らしを自分から諦めたのではな  
いかと思うんです。森へ帰った様子は、それ  
以来一度もありませんでしたから・・・」  
身につまされた。この話、まるで人間社会  
の写し絵ではないか。私はある人に思いを馳  
せていた。私もまた、このフクロウの親に等  
しきつた。情愛を残しながらも、絶縁しなけ  
ればならなくなる親と子、人と人、そして男  
と女・・・それぞれの葛藤には分かち合えな  
い深い溝がある。  
「身につまされる話ですねえ、私のようなエ  
ゴイストには・・・」

「互いに未練は強かつたのでしようなあ、よ  
く夜更けてから切なそうな声で呼び掛け合う  
ような鳴き声がちらからも、向こうからも  
聞こえてきましたから。情は通じていったん  
すな」  
「今まで引きあいながら、親は子に逢いに  
は来なかつたんですね？」  
「そこが、やはり人間と同じなのでしょうね  
え。きっと子を見放してしまつた親としては  
格好がつかなかつたでしょうし、それに逢つ  
たとしても、それでどうなるものでもなかつ  
たのでしょう。連れ帰つたにしても、そこには  
やはりこの片目のフクロウの居場所はもう  
ないのですよ」  
「その居場所を福さんのところに・・・」  
「うなつたのでしょうなあ。ところが一度  
居つくと、しだいにわがままになつてきまし  
てねえ。ミミズだけでは満足しなくなると、  
今度は力エルですよ。親が見放した通り、自  
分では素早く動く力エルが上手に捕らえきれ

「まるでそのフクロウの親代わりですね。福さんらしい人優しい話ですよ」  
「ところがですよ。・・・と、福さんは、今まで、群れを離れて、見様見真似でも自分なりに一人大きくなると、そこはフクロウの本性は持つていきたのですねえ、技術、能力は未熟で、なると話を続けた。その結末が訪れたのだ。」  
「でも、成功したのですよ。生まれてはじめての空中戦しかも大物狙いですよ。生まられてはじめての空中戦ありましてね、そこには水鳥が居ることに目をつけていたのかもしれません。畑の近くには溜め池がありましたのも私の世話にばかりなつておれないと思つたのかもしれません。生まれてはじめての空中戦した。」

「やはり、向こう見ずだったのですよ。技術不足だったのでしょうな、どんな戦い方をしたのかは、私の寝ている夜のことで窺い知るには、まだ池に腹這いになつて浮いていましたから」

「たのめんな。明くる朝、溺れ死んだまつたんですな。」

「そこで福さんは、しばし物思いに耽る様子だつた。それが、すでに遠い日の話なのか、つい最近の話なのかは、よくわからなかつたが、福さんの中では時の風化には関係なく、いつまで経つても変わらず昨日のこととで有り続けているに違いない。それが、部下一人もいられない万年営業部長として、冴えない凡人扱いされながらも、いつかは動ぜず、いつも敵わない凄さでもある。」

「何とも悲惨な結末ですねえ。」

「ところが、話はまだこれで終わらないんですよ。まだ続きがあるんですか？」

「引き上げて弔つてやろうと思つたんですけ  
どね、仕事に出かけなくちゃならないし、帰  
つてからにしようと、そのまま出かけたんでも  
すよ。ところがですよ、和久利さん……」  
もう口角沫を飛ばしそうな福さんは、そこ  
で、溜まつた唾を飲み込むと、目を大きく見  
開いて私の顔を食い入るように覗き込みながら言つた。  
「驚いたことに、帰つてみると二羽浮いてい  
たのですよ。」  
二羽・・・?  
「うなんですよ、心中ですよ。子フクロウの後を追つて、親フクロウも死んでたんですね。よ

「あつたのが有り得るんですか？」  
「そんなことが有り得るんですか？」  
「あつたのですよ、それが…」  
「い昼間あの池で何があつたのかわかりません」  
「異常を察知した親フクロウが、池にやつてき

て事件を目の当たりにしたと思うんですよ。

さてそこからですけどね、私の想像は

討ちです」

仇討ち

二十九日、午後、単衣を着て、手拭ひを取て、直元

術、つまり戦う技術を教えなかつた責任を親

ブケ口穴は痛いほど感してたに違ないあります

ますよね、百戦錬磨の親フク口ウが極めて日

常的な営みとも言える小鳥ごときの捕獲に失

と、この線は薄くなる。

福さんの顔は、もう悲哀を通り越して、真

「じゃあ、もうひとつの説とは・・・？」

それは、弔いですよ」

「弔い。」  
「つまり、そのう。」  
「引き上げをしようとしたのではないかと思え  
ます、かと言つて、諦めることもできず、その  
まま池に子と共に没したのではないかと思え  
るのですよ。」  
「いやいや、和久利さん。」  
私が口を差し挟もうとでもすると思つたの  
か、福さんは、そうさえぎつてこの話の跋に  
入つた。  
「この説も客観的信憑性は薄いのかもしそう  
せんけどね、そう考へたい、それが私が私の中  
でいましてね、ただそれだけです。」  
「いとくせん、うん。」  
「そうだつたのでは、うん。」  
「想像するのでは、うん。」  
「あるものなら、うん。」  
「誰しも身につまされることは凄い話だ。」  
「心です。」

よ。子フクロウの面倒を見続けて、情を通じ  
うに違いないでしょう」  
「そうですか、和久利さんもそう思ってくれ  
ますか」  
さんは再びあのいつも見せるような、大きく  
さも安堵したという面持ちを見せると、福  
さんは再びあのいつも見せるような、大きく  
口を開けた悪げない笑顔に戻った。  
すっかり冷めてしまったコーヒーカップが  
テーブルの上にあつた。口をつけることもせ  
ず、福さんは話に話し続け、口をつけることもせ  
ず私はその話に聞き入つていた。本題に入ら  
なければならなかつたが、前段が大きくなり  
すぎた。せめて今日だけでも裏取引は恥ずべ  
きことに思われた。時機を逃せば、商売は逸  
する。何事もそうだ。だが、私は、今まで私  
が腹の底ではいつも何を優先させて歩いてき  
たか、今の話で明確に思い当たることができ  
る。なべての人間関係の闇に深く分け入つた

ことのある人なら、誰しもこのフクロウ親子に象徴される葛藤、そして自我への確執と情愛の狭間で、もがくことになることを知つてゐる。その結末に於いて、自らが自らを始末することができるのである者には勇者であると言うことができるだろう。私は恥じなければならなかつた。自ら、自らを始末したその人は、今どもうどこにもない。

「じゃあ、和久利さん、また・・・」

そう言うなり、福さんはいつもの早足でドアの向こうに忽然と消えた。言うだけ言えば、もう聞こえていないのか、私の呼び止めにも振り向くことはない。『ところで、あなたのは話といふのは何ですか?』などといふ野暮なことは言わないところが、何とも福さんらしいくて面白い。残された私は一人、思わず笑みを零していた。そしてすぐ寂しさが私を襲つた。